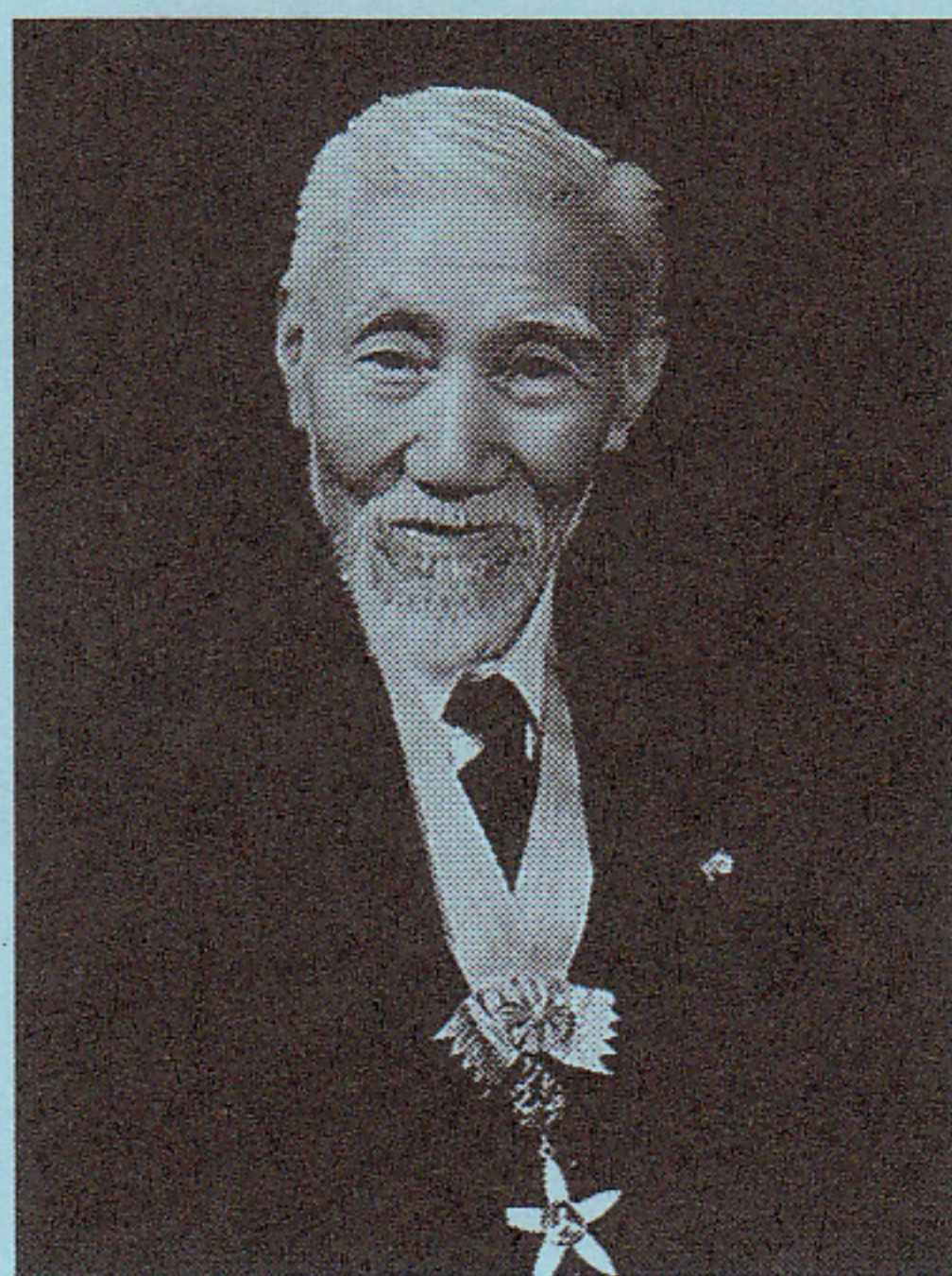




——随想（田中館博士の学徳に触れてみたくて） 最終回——

田中館愛橘先生 学徳兼備の大儒

松尾茂雄（会員 仙台市在住）

大正5年、先生の教授在職25年の祝賀会が、東大植物園で開催された。その席上先生は「本日、山川総長に辞表を提出してきた」と発言され満座を驚かせた。これが東大に定年制が導入される契機となった。この時、先生は還暦を迎えられていた。

先生は、留学を除いて、生涯に外遊22回、出席された国際学会等は68回に及ぶという。今日では驚くに当たらないが、欧州まで航路1ヶ月以上要したこの時代には、これは希有のことであった。国際学会等にまつわるエピソードを紹介しよう。

昭和5年の国際地球物理学界において、ドイツからの参加者について、第1次世界大戦の敗戦国であるとの理由で、その出席を認めるべきでないという意見の多い中、先生は「これは、つまりは時間の問題である。仮に200年前まで歴史を溯ってみよ。いずれも、敵味方でなかつたものはあるまい。これを洗い上げたらどの学界も成り立つものではない。ドイツと敵対してからもう10余年経ている。敵視感情はもう捨てるべし。科学に国境無し！」と演説し円満に収めた。また、明治40年から昭和6年までの永きに亘り万国度量衡会議の常置委員の重責を担われた。このことを高く評価した同会議ギョーム事務局長（ノーベル物理学賞受賞者）は、「地球には二つの衛星がある。一つは勿論月であるが、第2の衛星は田中館である。彼は、毎年一回地球を回って来る」と先生の貢献を誉め讃えた。

先生が出席された会議の中には、専門を離れた国際連盟の知的協力国際委員会も含まれる。この委員会は、国際連盟事務次長であった同郷の新渡戸稲造が発案し、自らその事務局長を兼ねていた。先生は、委員として新渡戸を助けた。委員には、人文、社会、自然の各学科の碩学が任ぜられた。ノーベル賞受賞者ではアインシュタイン（物理学賞）キューリー夫人（物理学賞、化学賞）ベルグソン（文学賞）ミリカン（物理学賞）ロレンツ（物理学賞）等である。この委員会の活動は、第2次世界大戦により、道半ばにして機能不全に陥ったが、大戦後はその事業の多くはユネスコに引き継がれている。即ちユネスコの濫觴である。

先生はまた、熱心なローマ字国字論者であった。自ら日本ローマ字会を組織し、ヘボン式を排し、日本式の採用を主張された。ヘボン式は、英語圏外では不適切であり、日本語を忠実に発音、記述出来るのは日本式であると主唱され、貴族員の年中行事として話題になった。昭和12年、内閣はいわゆる「訓令式」を定めたが、これは先生の主張された「日本式」と殆ど同一の物であった。

余談であるが、二戸市に県立福岡高校がある。この高校は旧制中学校以来、夏の甲子園に出場するこ

と10回、県下一の出場回数を誇る。選手のユニフォームには、「H」の一字が輝いている。これは「訓令式」で表示したものであり、先生の提唱に積極的に賛同の意を込めて採用されたものである。「H」の由来を実況放送のアナウンサーが解説していたことを思い出す。因みに、二戸市にある先生の墓碑は、ローマ字で刻まれていることは申すまでもない。

先生は、昭和27年に96才で亡くなられたが、その8日前まで日本学士院の例会に出席されていた。日本学士院は、46年に亘り会員であり、学界への長年の寄与に敬意を表し、初の日本学士院葬を東大安田講堂で行った。その後、今日までの50余年学士院葬の例はない。

先生が亡くなられた後、先生の脳の重さが東大で測定された結果、1180グラムであり日本人の平均より120グラム軽かったと発表された。関係者は当初、これを「意外」と受け止めた。しかし、その後毎日新聞に寄稿された名古屋大学勝沼精蔵学長の「脳の軽重」と題する一文に接し納得した。その大意は次の様なものであった。(全文は「桂堂夜話」黎明書房 昭和30年)「脳の重さと知能との関係は、身長と体重に比較考慮が必要であり、脳の組織・配列も重要である。目方ばかりあっても知的活動を司る組織が弱ければ立派な脳とは言い難い。後藤新平も日本人の平均より軽かった。漱石、紅葉、桂太郎は1600グラムの前後で平均より遙かに重かった。ツルゲーネフ、カント、クロムウェルは2000グラムほどであった。脳の重さの世界記録は、2860グラムで、この持ち主はアフリカの大馬鹿者だった…」

先生の直弟子と言われた中村精二東大名誉教授は、その著書「田中館愛橘先生」(鳳文書林 昭和18年)において次の様に述べておられる。「…世の中には、学はあっても徳の足りない人がある。又徳はあっても学の乏しい人がある。学徳共に無い人は、元より語るに足りないが、もし両者を兼ね備えた人があるなら、それは真に世の師表であり国の至宝である。恩師田中館先生は、学徳兼備の大儒である…」と。

—— 特別寄稿 最終回 ——

E・S・モースゆかりの水飲み場のこと

田中館愛橘会 副会長 川嶋 昭二氏

※筆者は、福岡出身、函館市在住の方で、田中館博士とはご親戚にあたり、コンブ博士としては早くから著名な方です。

私の記憶にある改築前の古い村井旅館は玄関が国道(現在市道)に接した2階建の大きな家でしたが、昭和11年頃の記録によると、明治天皇ご巡幸当時の客室はその後かなり改築され、天皇ご小休の間(10畳間)だけが当時のままに保存されていました。そのようなわけで、モース一行が宿泊できなかった明治11年当時の村井旅館を偲ばせるものは現在は何も残っていないようです。

次に、モース一行を迎え入れてくれた村井旅館の真向かいの民家とは、現在の福岡字上町3の酒造業(株)南部美人(社長久慈浩氏)の敷地内に居住していた国分啓七氏宅でした。当時、啓七氏は国分家10代目の当主としてやはり酒造業を営んでいましたが、明治35年その業を久慈氏に譲ったと言われています。このためモース一行が宿泊した「美しく清潔な大きな部屋」のある旧国分氏宅は、その後久慈氏社屋として使われてきましたが、平成13年に写真に見られるような白壁、黒柱の明治期の銘酒醸造元の雰囲気漂わせながらもモダンな和風建築に生まれ変わりました。そし

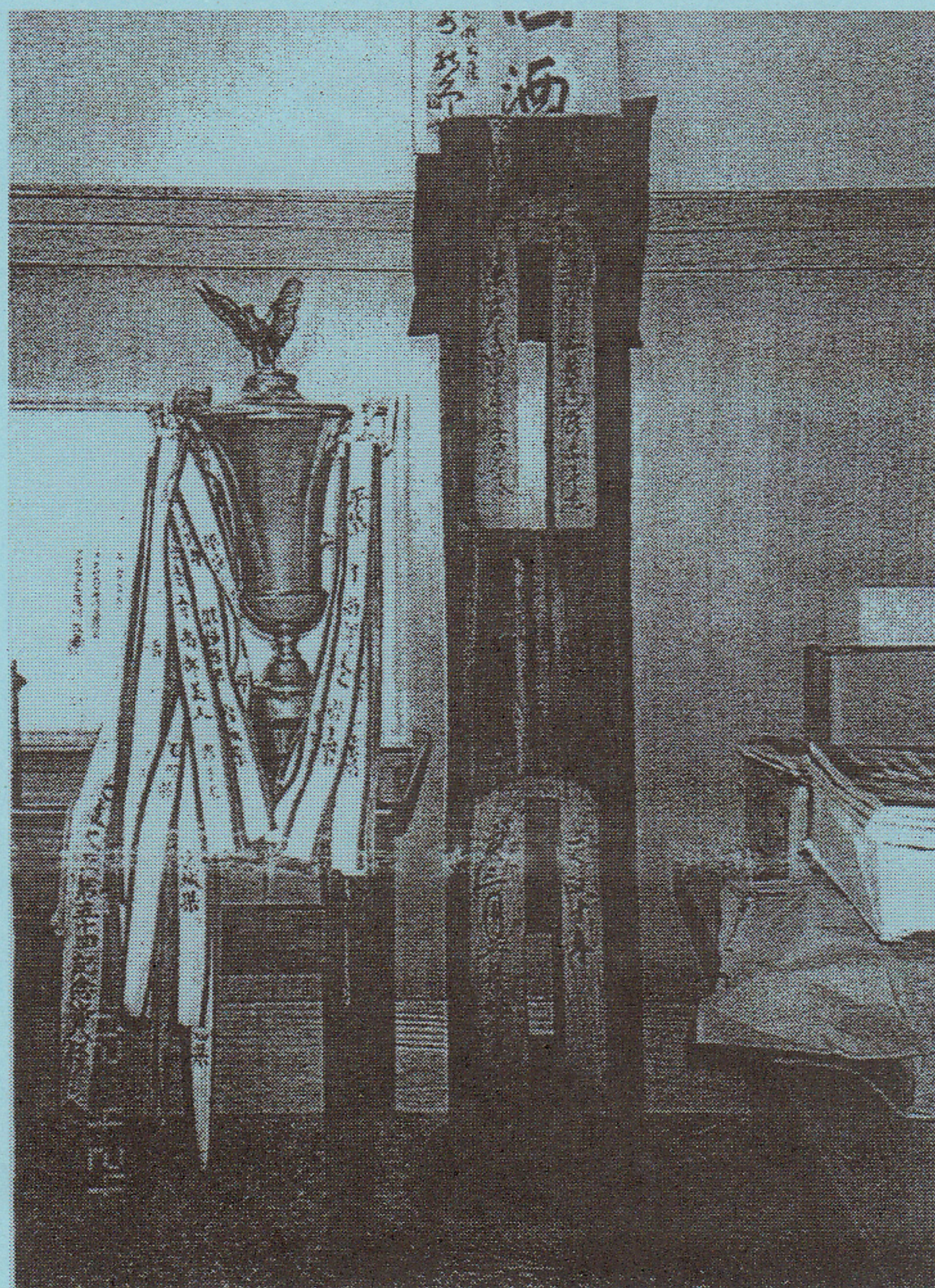
て、この時幸いにも解体した大黒柱に墨書きされた記録から、この旧宅が文政10年(1827)に建築されたことが判明しています。(写真3)

このようなわけで、やはりモースの一行が国分啓七氏宅に宿泊したことを示す直接の証拠も残っておりませんが、この大黒柱こそはモースらの安らかな寝息を聞いた唯一の証人であることは確かであり、二戸市の歴史を語る文化財ではないでしょうか。

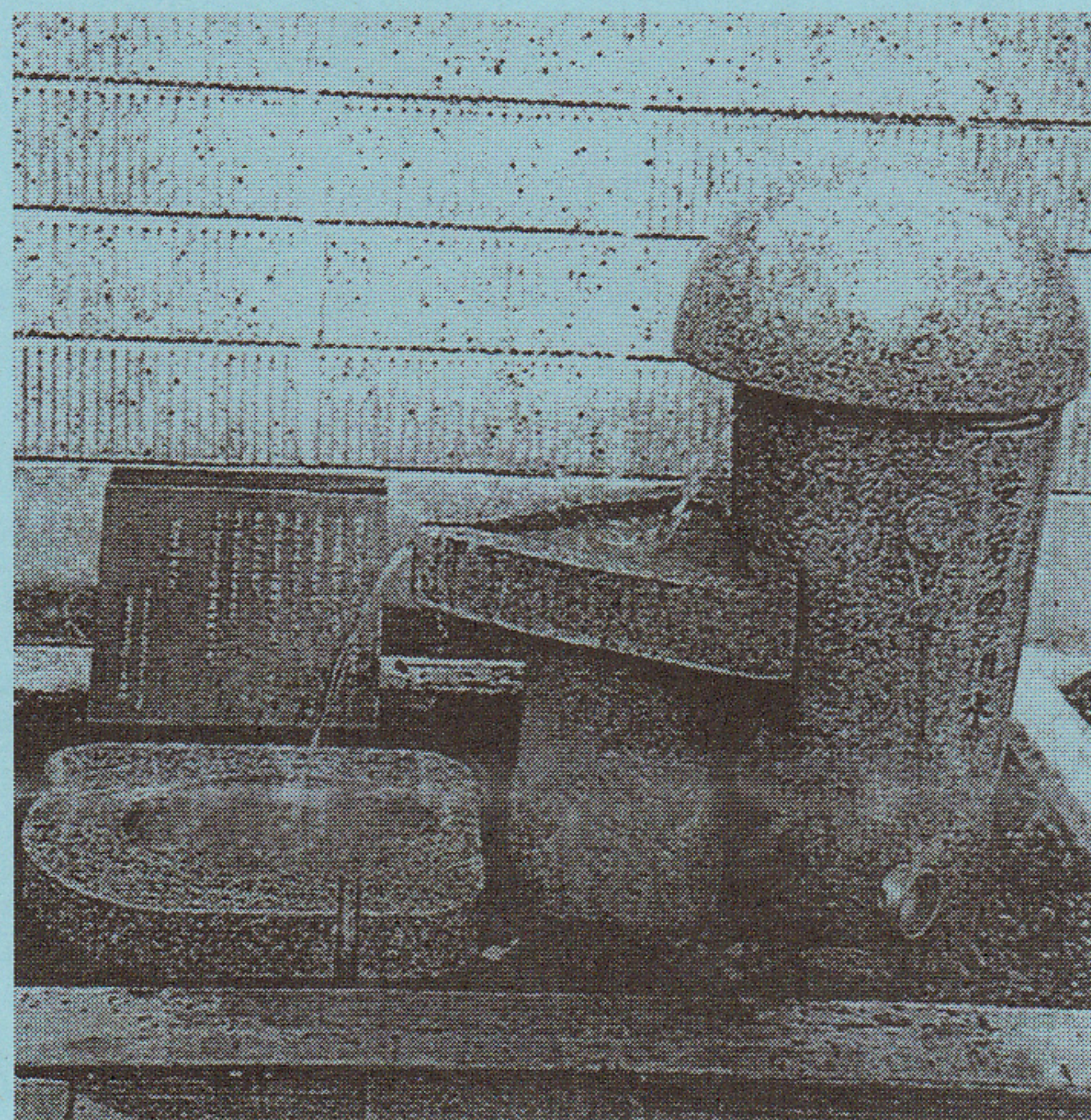
前置きが長くなりましたが、ここまで語ればもうモースゆかりの水飲み場が、銘酒醸造元南部美人の前の道端にある理由はお分かりでしょう。この水飲み場設置がどんないきさつで決まったのだろうと思い、施設を管理する二戸市都市計画課に訊ねたら、平成14年に小原豊明市長が「モースが福岡村は町並みが美しく、道端のあちこちでおいしい冷水が流れ出していると紹介していることにちなみ、彼等が宿泊したゆかりの場所に現代の水飲み場を作ったらか」と南部美人の久慈社長に協力を求めたことから話が決まったと教えて頂きました。このようにして水飲み場は平成15年3月に二戸市の施設として完成しました。

醸造工場の門のそばの歩道には「愛宕(あたご)の清水」と刻まれた御影石製のしょうしゃな水飲み場があり、二段の石槽にはいつも冷たい水が小さな音を立てて流れ出しています。(写真4) 愛宕の清水という名前は、醸造工場のすぐ裏手の高台にある愛宕神社の石段の麓から湧き出る水を水源としていることから名付けたもので、湧き水はここから工場の敷地内を通る配管によって運ばれています、この湧き水は昔から付近の家庭の生活用水となり、また高台の上にある県立福岡高校野球部の部員たちの喉の乾きを癒す飲料水としてよく利用されていました。また南部美人でもそれと隣り合わせに掘った自前の井戸の水を仕込み水に使うこともあり、これは正に銘水と言っても良いのでしょうか。

水飲み場の背後の塀にもこの水の案内板が掲げられ、飲料水として安全であることを証する水質分析表も添えられています。ただ、衛生に配慮しただけの立派な水飲み場なら今では全国の道の駅など公共の場では決して珍しくないでしょうが、天然の愛宕の清水の水飲み場にはこの紹介文の冒頭で紹介したモースの一文が刻まれた石碑(写真5)が建っていて、流れ出る清涼な水を汲む人々にこの水飲み場のいわれとロマンを語りかけているのは、恐らく他に例を見ないモースの記念碑と言うべきでしょう。



(写真3) モース一行が宿泊した旧国分家家屋の大黒柱の一部で、文政十年丁亥三月立の文字が見える。南部美人社長室に保存されている。



(写真4) 広い歩道に設置された「愛宕の清水」水飲み場。ブロック塀には説明と水質分析表が掲げられ、石槽の後ろには「日本その日その日」にモースが書きとめた福岡村についての一文が刻まれた石碑がある。

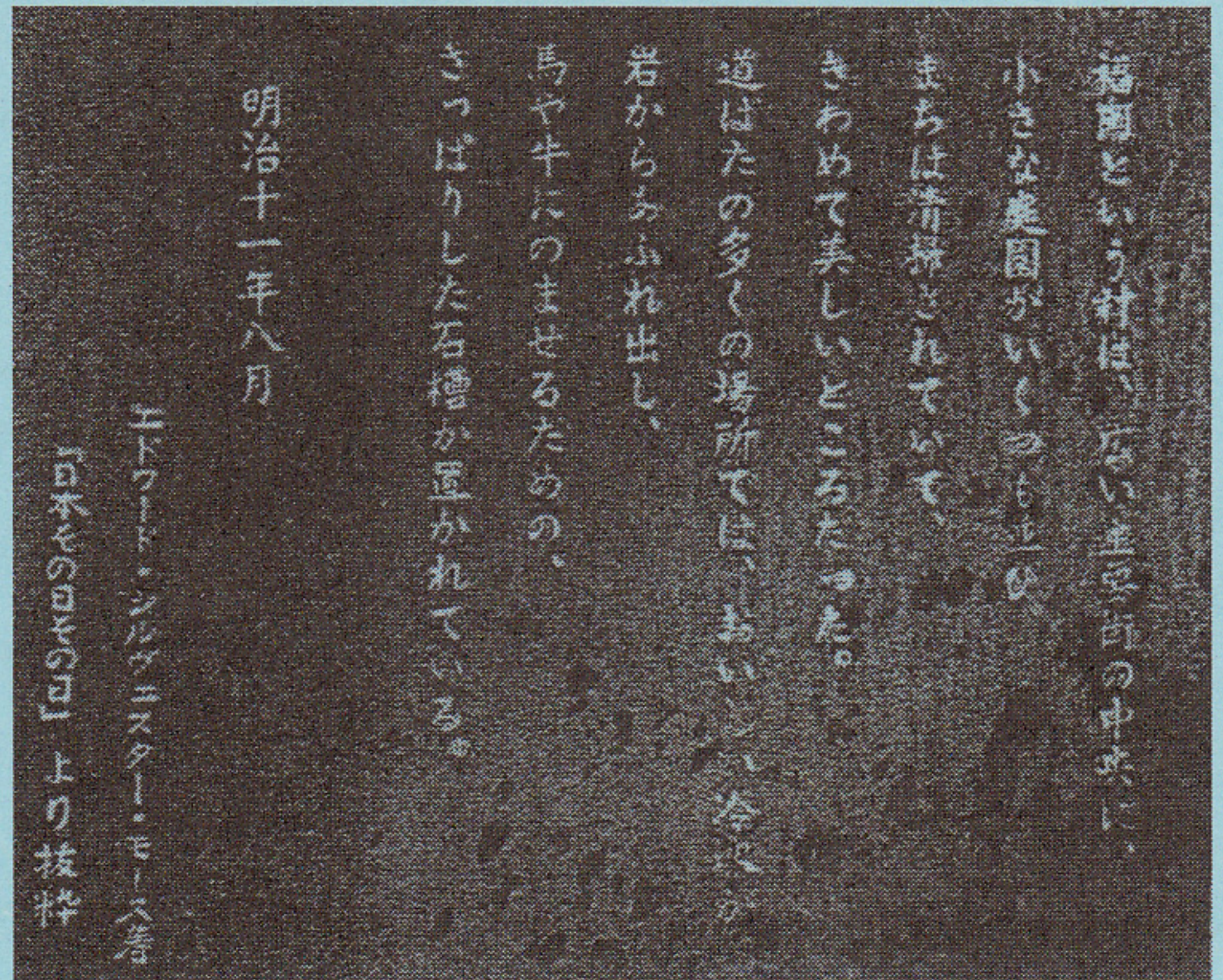
二戸市福岡のモースゆかりの水飲み場を訪ねるには東京から東北新幹線で三時間足らずの旅です。ホテル村井に泊まり、道を隔てた水飲み場で愛宕の清水を掬し、美しい自然に触れてモースの足跡を偲んで下さい。二戸の銘酒大吟醸南部美人のこくのある味も絶品です。福岡には、明治10年にモースからダーウィンの進化論について初めての講義を受けた大物理学者、田中館愛橘博士の記念科学館もありますのでモースとの縁は深いものがあります。

— 筆 者 後 記 —

この一文を草するに当って株式会社南部美人の久慈浩社長並びに二戸市役所都市計画課の工藤氏から種々ご教示を頂いたことを感謝いたします。

また、文献としてモース著・石川欣一訳「日本その日その日」2（1991 平凡社）と鵜沼わか著「モースの見た北海道」（1991 北海道出版企画センター）を使わせて頂きました。

(〒041-0851 函館市本通り2-20-23)



(写真2) 石に刻まれたモースの文

新 会 員 紹 介

小野寺 堅司氏 (二戸市 石切所在住)

そ の 後 の 歩 み

平成20年 9月11日 第3回資料調査委員会 (於・シビックセンター)

11月10日 第4回資料調査委員会 (同上)

※二戸市シビックセンター運営委員会 (同上)

平成21年 1月19日 第5回資料調査委員会 (同上)

2月 4日 第46回田中館博士記念小中学校科学研究発表会 (予定)

~~~~~あ と が き~~~~~

☆平成21年が幕開けしてもう1ヶ月経ちましたが、会員の皆様にはお変わり無くお過ごしのことと存じます。

☆昨年アメリカに始まった金融危機の風が世界を駆け巡りいつ収まるやら…

かてて加えて年末から地球の一角に端を発した戦火が未だ収まらず…

憂うべき事態が続いております。願わくは、世界的・国際的・救世主的政治家の出現を神頼みしたくなるような… (1月13日現在)

☆寂しいことですが訃報です。

故小保内敏夫氏 (12月)

故人からは、愛橘会発足時から長年にわたり副会長として、また二戸市議会議長として記念館建設に係わっては甚大なるご尽力を賜りました。今ここに、皆様と共にそのご努力に対し大いなる感謝を申し上げながら、心からご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

《会報のタイトルについて》

*写真は昭和19年4月、文化勲章受章の時のものです。

*氏名、サインとも博士の自筆であり、サインは絵やローマ字の書き物をなされた時に主として記しており、両方とも印鑑にしているものも有ります。

《会報の発行について》

*年2回発行 *編集者 佐藤綾夫 (事務局長)

《発行所》 田 中 館 愛 橘 会

〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡55

二戸市シビックセンター内 ☎0195-25-5411

F0195-23-3548

(振替口座) 02350-8-18841

《印刷所》 沢 倉 印 刷 株 式 会 社

〒028-6101 岩手県二戸市福岡字城ノ外38 ☎0195-23-3107